和朝今

参

尾州名古屋 御加永屋

今昔物語 倭部 三 目録

○世俗傳

一 延喜帝御時伊勢国伊勢守藤原興範讃和歌語
二 敦忠中納言南殿桜後和奇語
三 公任大納言後冷泉和奇語 附白川家後和奇語
四 後京實方朝臣陸奥国後和奇語
五 筑前守源道濟家人妻寂朝後和歌語
六 伊勢守貞所幼時後和奇語
七 元良親王後和奇語
八 大江匡衡妻實方和奇語

書肆明倫堂 肆 明倫堂蔵書

覺人書屋 家藏

今昔物語 巻三

○世俗傳

一 延喜御屏風伊勢御息所歌事

今いまは延喜天皇の御時に、御屏風を調じて、その色紙形に、所々の歌を、斉敏の大臣、小野道風、橘姓、正四位下内蔵頭兼前守大宰大貳葛絃子、をして書かしめ給ふ。春の所の山吹を、ゆくの色紙形にかきて、さ野がくれにて、斉敏の大臣、

九曜文庫

道風をもてゆゑびとの歌をよみ
てこれいうぬきを。今日かをりていふこゝろ雅
なるはことぐきと作りまてたゞしはかりをしめ
して。為家伊衡（従四位下参議右中将敏行子）をもつて殿上人ばかり
うて有ける紙をかく作りまていとく。呂人今伊勢
御息所のもとふるくふるるをんなを
て被遣をんなをもつてをしやりぬ御使よ伊衡
をはいさるいかゝらはをしけるそをこ
すれさ人梅をれいぬ御息所もとをいるべさい
思をうとをゝびをそれるゝをゝびぬ御息所い。

きいるく物のよをいるく有ける。大和守為家忠房
をいふ人乃むすめをもちて（按此説甚非。系圖ニ曰伊勢御息所。
息所。伊勢物語作者。父内麿 始ハ七條后宮女房後ニ寛平法皇御
三代孫伊勢守藤原滋蔭）御時ニ参てありけれ。天皇（字多天皇世謂寛平法皇）の
しるしてを御息所をもをされけるなり（伊勢家集曰文
ぬをのをしたゝをみをぬをしををを

とし[illegible]ゑ乃法師ゝ[illegible]をきゝて。大内山[illegible]

[illegible]く入て。おこるかつを法[illegible]

後撰集に。[illegible]の段乃詞

儀敏乃歌[illegible]かさつき[illegible]

[illegible]

[illegible]

う。打未那の九帳乃きよげなる。三間ばかり
副て。あてうの糸三間ばかりを去て。四人乃屋
風の中納言をそらうう。母屋の簾を副て。ゐる義
編乃畳紙敷くの上乃唐綾の茵をそらい
板敷の上ばかりを去て。清げなる。新のうあく
うはうてうも。屋乃てい。ふうう〳〵。神さびう。
奇て茵乃ひとつ。居たれば。内よりを蓋のあらひ。
ひやうふのぐとうりつぐ。やのぐとうりつぐ。きよげ
なる女房乃額つきよりれば。ここ人ばかり簾より
すこしそらうう。簾乃氣きつみ〳〵く。板あらて

わらし。簾のもとふちくよりて。内の作りまよ作。あ
文のもり。色猫よ。房風してまるふ。ろ紙形て。書を
料ふ。紙ばかりばかりふ徒をそれつるみ。ちくく乃西。
世ひ。ひ〳〵てうのところ。色紙形て書べき歌
なり。其方よりもべき。躬恒貫之をめきするみ。おの
くものよりさう。今日ばかりは。ちうう。異人てい
つべきやうふうしば。山紙をば今よりみく屋〳〵
あんやあん作作つくべ。侍乃所ばかりて
よて作りそよりもも。躬恒貫之が清ばんや
うう。なでうあん西〳〵ておくにいうそう清ばん

いとまうをれ作てまゐる。ゆゑいうくべき事ゆゑ
わらびといふこゝろをかくうんゆゑ。けうしい氣しるく。
乾殺つゝて奉る。伊衡これをゆゑてゆゑいうこゝ
人も有まうとゝうう。ちびゝづゝあれいつゝし
さ童女乃紅衫をうるが。紙をもて蓋れ四
ちゝ出くく絵かくゝゝ盛ゝ。盛をとゝて
ちゝ出ゝゝう。又女房童絵よ前ゝう硯乃名かん
蓋ゝ。きよげなる海松を敷く。麦菓子を入て。
さゝおゝう。酒をとゝめゝれば。盛を反よゝゝみ。
童紙をもて酒と入る。ゆゑいゝといふ。おさん

童入ゝう。酒のしゝ初ゝうちゝと。ゆゑいゝおゝ。
飲て盛と盃しとするふ。そびくちわきびゆゑ
殺ゝう飲ゝく。盛と盃ゝ。麓の下ゝう盛紙さ
ゝ出て。又飲べさゝうとゝ。辞をれゝ。きゝう
ゝちゝうゝ。そびくのゝ。ゝ。大よ辞ゝう。女房
きゝ将をゝうゝ。赤ゝう影つゝ。桜乃ゝれう
ゝゝひゝて。おゝゝゝうはくゝ。程久くゝて後。
ゝゝの海松ゝ。鮫とゝくゝ。ゝびて。月色の
うすゆゝいつゝゝくゝ。女乃装束紙具して押ゝ
ゝう。赤色のかさゝゝ唐衣地摺乃裳。流袴ゝ。

物ひいろきいたりてきさらふいみしぬ。ひとしなみ
ゐられとついでゐるとそこらわ。女房どもゐ少将乃
出るを見えわたりてゐはるとうぎうれ門をあ
てかくるまでえるふ。あゆくうろうろとをぐで
さを見ゆるみうしなくし。車の物とも出えどをうね
をいでいくあくれり物がえて。居ゐ巳菌のろう
香をたんつきを地して取去ぐく物がえうう。
かくて西ゐいかねいあるわやくやく人してうをを
さをのつ。殿上口の方ゐお返乃ゐして来れば。
ゐてあるうるとりをべ。疾くと作るふ。道風い

筆を濡しゐゐるをて。清涼殿に作をゐるところ。
作衛物紙ゐつさて来ゐ。殿上の戸ゐかりて被物
をいゐるく。文をもゐ来ゐくを。天皇これをひ
らきゐ清涼殿ゐるふ。つくくゐいをを立て。道風
が立ゐるを。物くゐいをゐ。清涼殿の歌ゐ

散らしがきの歌ゐるゐの花をてゐるをあいをん
天皇これをゐ清涼殿で。目出ゐがをを。清涼殿に
上ゐを殿上人ゐゐ。これ見ゐて。ゐいをれば。
物ゐき者ども紙をゐつる。神の御ゐ。ゐゐ
ゐうぎゐれ。ゐをいゐ。後ゐゐ。道風ゐ

ぬる。まろれば。沛恩所門いつみ。資頼法師なり。絡
はくえんなくちなり

二　敦忠中納言南殿桜後和歌語

今いまは小野宮右大臣実頼公太政大臣忠平公嫡子たかあきら
てわくけるとき。三月中旬のころ。公ものしたまふ。
門うちのしの。陣の座ふ。上達部二
三人ばかり参て。作ばかり。南殿乃清涼殿の
桜の木大ふ神さびたり。枝も長くさしでて
ゆゆしてぞはくえたりける。風ふきそそれて。
清涼殿乃浪ぞの桜ちるへ。水乃浪ぞの桜ちるへ。

と大臣嘆ていはく。きさきのうれ。土御門中納言系圖
曰。土御門権中納言経通者。権中納言懐平之子也。経通子。又
曰。権中納言経季右所謂中納言者。経通歟。経季歟。未審。蓋此
下文。以権中納言敦忠混土御門中納言為一人者。誤
乃ちまろれようこしとみをば
家人をおくびおをとれうまろ。
けとび。土御門殿中納言の家をあうど。
ろれば。大臣いみしく奥あるうれと。ちとび
まろ。殿ばく中納言を参て。殿ばく長やかた
と。大臣ば。乃ちを出みちうあ。ばかりうえ
まて。方をれば。中納言げみいみしく作ばかり

大殿たちうばはそくこうを作りて寄をいれ中納言
ものいみしゆうじ大殿の南府和方ときこえ
うるに人みれば〜ほとぶきにうくしてあうん欲
を面白く出〜うんいあれういて〜はうなりぬし。
ちうとして屋ん〜これを人のかくせわの事とぶ
さんも俊なうべーとおしく祈うたあくをそかく
うんやとをは
あるはれものやげこれあべはまぶうあこぎうあとれ
大殿これときこえいてつかくうたのいてはは返
うやすうるしぶ〜。わうまうんいぶきあうぶし

海さうん事いかりべきみあべ。古歌と吟ずべきとて
もののぶさき
義忠房 右京大夫従四位上信濃守興嗣男 ぶうわこ〜へゆくて待うう
ある方紙をんううるしうる。此歌は拾中納言は。
本院大殿 藤時平 乃在所れ小方 在原業平孫而棟梁女娘國經妻後時平奪之為室 生忠敦
系圖曰敦忠天暦六年三月七日薨年二十八 此説大非。
あうまうる人ぶ〜もあうけまべ。せう坊ぶうえるる
やうふくをを。名をべ敦忠〜ぶいしうる。又本院
中納言〜もいしうう和方とむて〜ぶよけぶれ
うまれうぶ海さうん紙をん出〜れぶいかくせる

ありまさのやすちかをぞ。かうはしてとありける

三　公任大納言侯深閑和尚語は松尾川家侯和尚語

人々いとをしと六十六代一條院の御時。上東門院（関白道長公女子彰子）はじめて内裏にまゐりたまひしかば。

あらたしくせさせたまひしく。色黒のようむ料よ。歌侯

どもに作をまゐらせ。六月の晦日の夜のうけたまはりさだめ給へ。

うるはしき帖紙。公任大納言（四條權大納言。従一位関白太政大臣頼忠男）あつて

つて侯ひけるが。すでに其日のうちに。人々の歌

い。皆まうしまうしたりけり。此大納言おそくまゐり

まいりたれば使ともをして。殿上にて関白殿よりも

さきびくいひつかはされけるは。行成大納言を（正二位權大納言右少将義孝男）

を結びて書べきさうとのまいりたれば。いとく立居

もちひびまいりたれば。大納言まうすべき侯

どものけうくさく。歌よみいでざりけり。さて

とこしへ大納言の所へよりてみきゆいあれば

ゆゑ。皆人もゆゑをしらぬ。所あり来

あやまちをしと思ひ。所へ行てぞと作き

ものを大納言をけうくさくもいふまうしぬど

はべりてなりたんいはせうとうの事
なり。其中にも紙屋どのぶつとすぐれる紙長も
不作なりとぞ紙のけうくもとめんとぞ
て作りをいに公任がなぐめみるべしとついて
くいまの人々なれども。敏ちく人の行いまてもあり
なを。其時紙すくいとぐく色紙形をとれば
ぬぐとまりやうみせんまひ名れば大納をいみ
く作りぐれしぐびいぬ名れしく云ん出さぬ
くれよりて。作りまぬ中にも永任とうてとうひ
作りるみのくきしのやなるとぐくいべいて

紙をうみ作。ひぐぐたうくうみ撰ぐ作べぬゆて
公任いまん得さうも理なりぬぐゆうをまもも
とぐぬぐみのうまきみべぐ。敏ちうしてやうさ紙
みべ大納をみるひまぐしして見い長さみうの
やいて。ふてうろうち陸奥紙よ半ち云紙取
出し。敏よまうみべ。敏こしをうく。清蔭うを
みみて。清みれたた大臣宣治敏 道長公嫡男頼通公。後太政大臣摂政従一位
同二條大臣敏 道長公三男教通公後関白太政大臣従一位 ようけぐ先て。
うてぐくの上達部敏上人は大納をいを事上にゆえ
なくいまん結いぐゆてうゆうくみて。陰日乃

大納言殿とにひきさるゆうに侍人をしひきそ
ひとさいぐみ殿をあるくして侍とのふきすに
ひきたのやとぐそゆう義の花いつゆやのちるめん
そこばくの人ぞこれをゆめて。脇をあるいてつみとと
わたのぞうくう。大納言殿人くれはいつとちひ
ちる氣色みくぶくに絵い蒔はるぐで。殿ひと
しまんぶひ大納言いとうぐみちゆんでちゆう
くるあんに。和歌しひてこれぐづくしぼ〇小自殿
しまひくうくるんうつえぐるくちう
又公任きのうの白川のあとう桜のちるはのちる

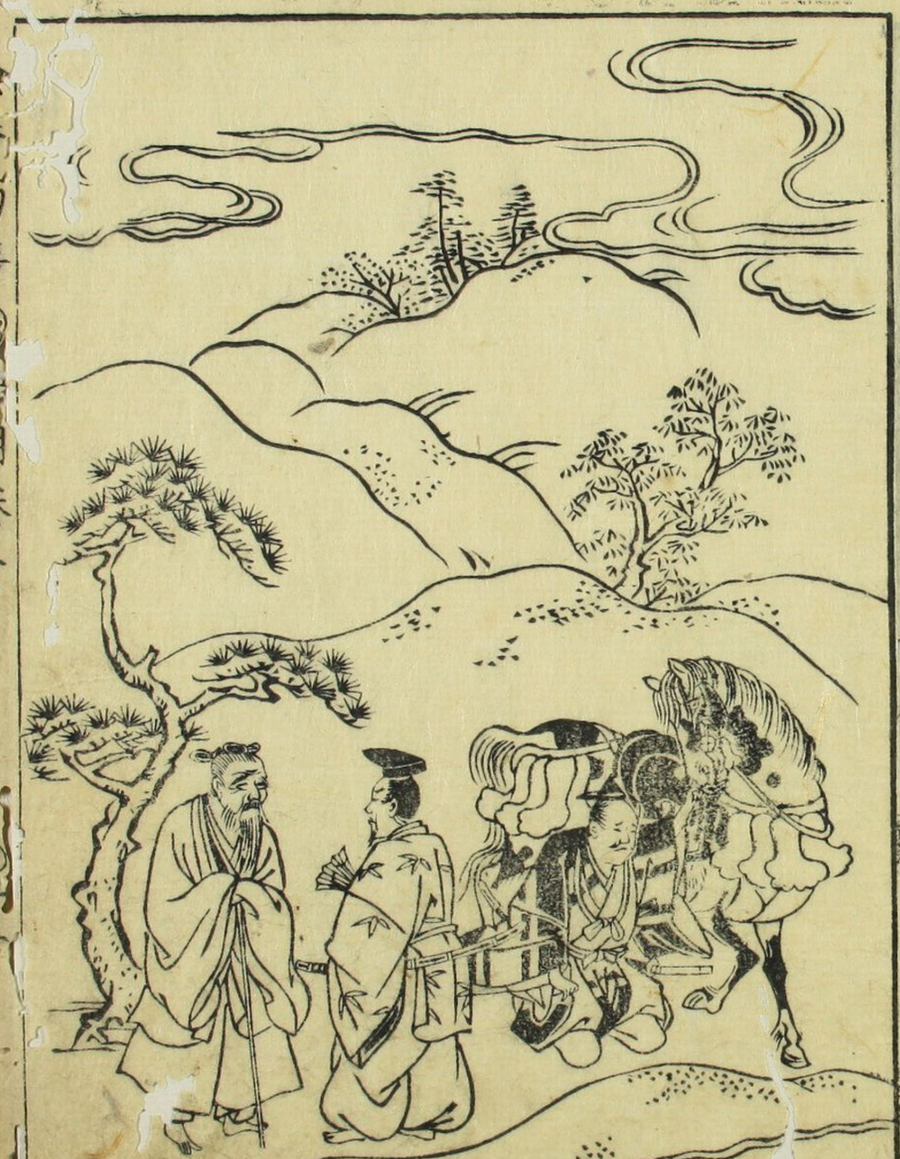
ふべき殿上人四五人どうのくれのつみくれ作
べ。月よ来うはるあうやをひくれいに酒をぐすあそ
あそびあうに大納言
ききてぐ人ぐひくるる宣いれをゆぐのあるぐあうれ
殿上人どもこれをきてつくうぐくよんけまぐも。
これは仰ぐくもあるよ大納言殿の三
條左殿大臣うせるひさうはるあ九月中旬ぐつ
月の明うくるふ。あうけゆく程う。それをぐわ
て居ちうあうん。侍の方うぐ明うるれく人
のいひくるがきて大納言

いつくしきものとて渡りそしてやがてあるべきものの
やうにみえけるを。みけ大納言九月ばかりの事なり
きさいの宮紙にかくよめる
すむとてもいくもすぐせぬ世中にうきものがたりのか
公任宰相中将にあうくるしきうきものがたりの上巻紙
殿と人をもて奥にて内のそいんごろみ。大井川より
てわたしいるゆみづら堀にたづしぐほうなる
ふくよめる
おらばやうのみづとこれば大井川いとはれいとるかいろ
けい大納言のもけしさいはい。二條殿の北方
二條教通既註千前北方。公任の女子

左政大臣信長公母

なりけり

陸奥にくみとりもてぐ稚ぐ侍りけ
けい大納言世の中にうきたるかうはさるん
ハ宴菊紙にそよみけるる
をもおくさく白菊にあるとぎれたるとぎにて行
世の中をうしくくあるかうるみ公任ハ
よんにけり
さいきうにわうる世の中にうをほどすぐしぐるん
関白殿の大殿にまいりてなくきいろ房風うの紙



ゆく八はしらうるはしくかくのごとくなんよろしかりける

四 義家實方朝臣陸奥國に行和歌語

今はむかし。義家實方朝臣といふ人ありけり。一條大將濟時（濟當作定）と申し時、大納言のおとゝ一條院の御ものもとに近き中將にて殿上人にぞありける。ひるけど。陸奥守に成くだりきるに（古事談）

の宿を取て小屋をよそひて行成と飯上とは長く海の向に寒方行成
て冠纓れよせ給へていとくたの道うちおくとする公達ちとみと立上小都
より待給へして行成いたつふぐさものうちて義人所よ衛せ給ふ
寒方とべ宮殿にて事れ
て陸奥守任ぎ侍 右近中将源宣方朝臣中いし
ます人いた大殿重信 敦實親王二男 のろ多ろ。寒方と去
り禁中に内きるこ紀。源ゆくいひうよいしてき
いわろ物云てわるきるふようて。寒方ゆく
けれて陸奥国ろくぐうてゆのゆより宣方
のりみ。かくうんいひはいいしろる
やとうでらい三月東路よりろるの紙ろろ
又道信中ろいて人て。寒方とうぎりうた物

うて内きろう。九月ぐろうれ行来見よゆんと紙
しゆ。左行中ひけどうれ中ろ行ろ
中ゆろく源くひうぐ
ろひて人ろれ源ゆとひうあけき秋の紙る
道信い恒徳公乃ろにくわろる。又寒方中ろ
ろりわろれてうぎりれくちひうそひねく
秋の美ろ。真らぐ紙ろんてさわく後ろん
うろねのよろ美のろれゆ紙ろ紙ゆ
やていてうれろ書ろう。陸奥守ろて。寒
所ろ之ろうて。一書曰。寒方三年の間ゆ紙ろとろうろれ
うゆ屋のいろ紙ろ陸奥守

なくをしゆるくんもあるとうとてちくしぶ国にくだるものの
ちくをしゆるくんもあるとうとてやをしゆきくるいぶ
うしのむまよあり。家方とりていひくるいぶ蝕いかし
もとくんよこをかくすきぶ何事をとりみあくのれを
さぶひう称ことをかくすきぶ何事をとりみあくのれを
のみちのくれわくやの私のあぶくれよいぶぐさ月の出やくんう
とつくるかうぶるをかをしいぶぐやこうけるぐくんぶつ
くぶうきくるうやといへば家方さいてそといふ義いくく陸奥出羽
ふもてかしとこそ。ぶちのくとうみくれぶ。ぶ田よりれてないい
出羽よかるうのうの出うかくくてふぶくとりくれば出羽うう
越くぶの名郡の私をもぶくうかいひくるい拾寵
大明神とぐ家えしぶかくくれる和紙ちくてきちくをくれぶくくく。
勅免いかくるくる。○東宮随筆曰家方奥列よあるくくれぶ奥
別よい菖蒲おさんれ水辛いかれぶるくそ月あ百よいうくとうう
をくくくくうぶくきくうう田のかくくひとかうてうくくくく

ひとくるまに乗てはくりの妻とさだめはくりの妻
をばわをれよろづをとの妻い搦の宮とぞ
うとぶやがえさうろれば物つきいくるゆうの
だくにすれとすれ人といちみとこぞ祈ぐらい
人の家ものがんてはもてわたりてとぐらまと
けまでも物つと耳にゆ入ど女ぐちつと消
息をぐに見ざりろう。おのが家いりの妻と亀
ゑ。今の妻ぐりふ行搦ろう。ぐある程ろ。
この妻やしひげとて病つにろうたづにつき
てさるものていう京より異しうまる女童

ひとりゑんかまる。ぐくこ病して御ようを男ぶ
許よりいたりいしろうれども。関もいしだ。ゆ出仮
行くすでみうぎろうみ成をれば。あれよもろ人と
ちに搦のそうて。ゆんどるこ仮うれて。物を
やがえぬちちゆぐ。御よ文と書く。女童を
もつて男のりふたりつと。女童守乃鎖にりち
ゆろう仮。男とうそうしろうくこ返るもついさば
してゆろきはくざりいいて。ゆのらいるもの
いとざりろれば。女童ゆしもびてうろうゆろは
男乃母。傍ちろ。ゆて男ろう妻ぐゆろへ。

何ともおくびらてこれば、いとうれしくなりぬ。一書に、「家の男いとばしとも
うしろめたくやうれと」一書曰、吉田中納言経光卿の家の男、
すてくこの女を見て、妻女をけまたにさえて、うしろめたくやうれとよみくもあるも
おくさはるけ男いとばしもてこの女を
あり。また
[illegible]行足
ひたこれをみくに情あるものにてあくれなくて
うちうぎりれ。ひさしのあまりに、まり道濡よ
ひとをんをそれば。守これをみくどもにあくれな
ばかりえく。男はよじいくこれいうあるまぞと問。
男のくとをとをばどしてあるまとうをろ。
守ゆめて。海い人よいあるざりうろてのの妻が

う人をありてそうひさせそれば。女い文をゆりてせ
者が帰るはまちつまばしてもれくるれまろ。
使ろてそうほうとに守おさけある人りてが
ぐうおくわしれがるて。ぞづはんとの行紙をて
我海を手はに不役りはりいてはしいてこ今い
うぎうなくくやしそれ。海い人間ていあるざう
つろのうとて鎧の使をもんく。岡のさういと追お
しまうのくてそれうる妻があり人をはういて。
見ばれうるゆうけ。うくさせ侍をばよづせる。
後のわざなりこまでい。おまをろ。夫の守い今り

毒ごのかくれよせざりけれどもとぐきうされくて。人
の家のめのげうろう新くのうそよろうろうしもも。一巻
のそくりくもあうるとろうれしもも。一巻
ばくくもなく失くうろうとゆんうつうえてうるる也

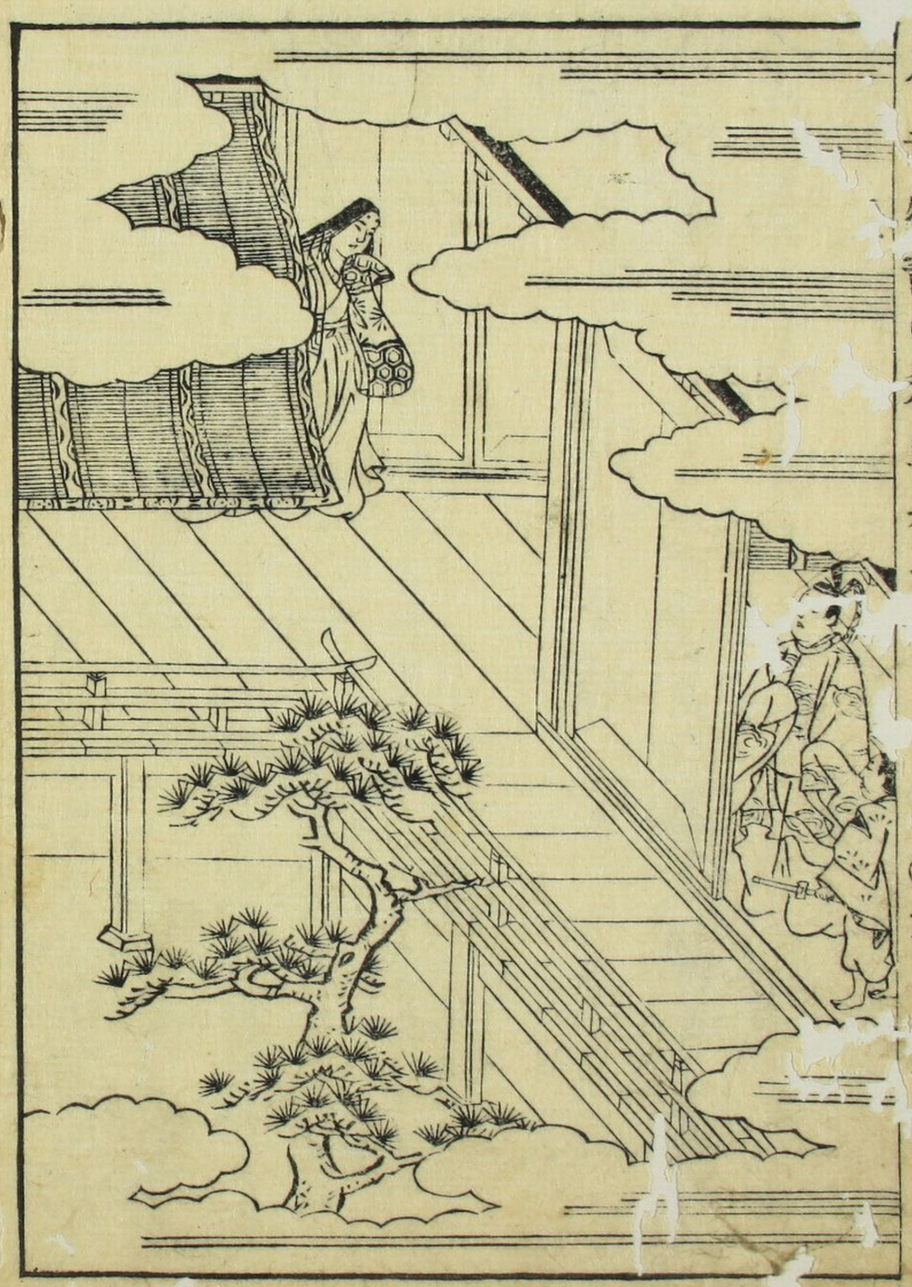
六　伊勢守息所幼時侯和歌語

そいそくく伊勢守息所いとまいとご七条后の御作り
作しいろう時。枇杷大臣　藤原仲平　かねうて宮をうぶ
のびてかしいのしいろう紙。かくけとそれど人皆ろう
てくうぞのらがねかしいあうどとそうとそれ
びかくよみくゆんゆうしうるもう　伊勢

人まれど絶えず侍りけるいつもあるべきかいあるべき
かねこれをみくおくれよおもしいろんそのちいあ
らいてかしいのしいくうとなんうつくうるる也
考よ新千載集よ。女よつついしける　枇杷大臣　かくまねのそこ
の下岩水くれてちくくあるいしうるもう　返し　伊勢　元
ぐれようるぐうれちさいあぐらどもかゆうれ。
ちうくしいろうの可めぐ。びは伊勢守文帝の中ちあうて。
樓文を
まくう

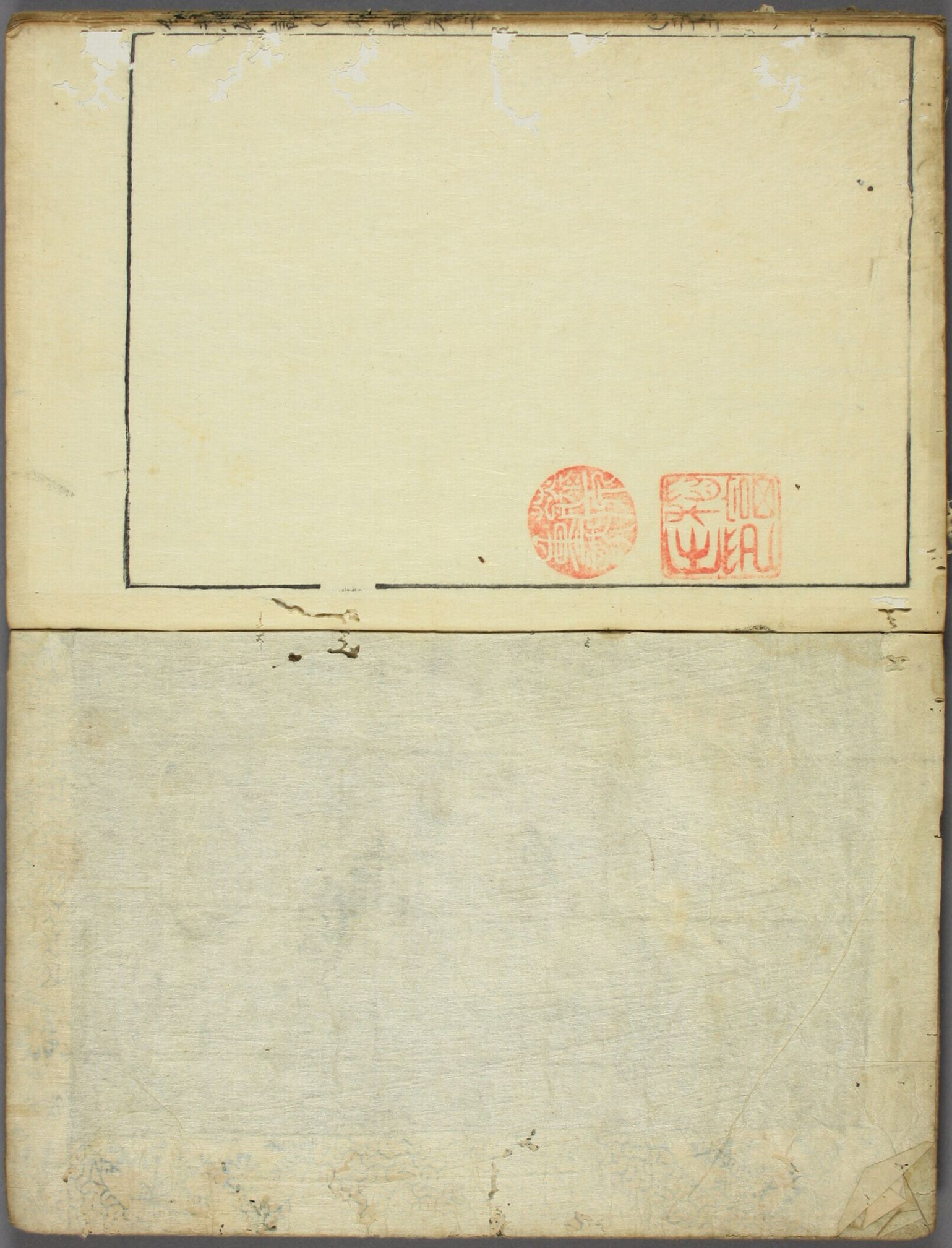
七　元良親王侯和歌語

今はむ。陽成院乃御子元良親王とゆう人
おくくうつみしきめうもそあうるれば世うあう
女乃家兼ちうときゆうはあるもいまぐうは



ざるしほ○うえを取る紙もつくりけるなりしくり。
そのころ枇杷たなたのはの作よ。女童わらわ。ろ紙
岩瘍といひろ。かくらかる風呂藥とて。さろ
ぐくわうくうをそれば。うれさこるあさり和んごろ
うしひろれども。きろざりろるあぐ。ある人きさり
ゆ白紙にくして。餝しけまば。辞しがくゆ
金ふろうそめちいは山男。きのびくに大れ氣
乃屋りかいろ。元良いこれをきびてろの
女れいたくしきゆ白紙やんて。きびくいうをろれば。
男あろうはいえぐて。うまれく返事をぐゆ

せざりければ、ねんごろにいひけれども、
かたくなにたゆまざりければ、
女返し
いとをしみ。（文字減）とこそまうでこどうよびまゐてこそ
此親王はめでたくおはしましけれ
はべりけりとぞ
八　大江匡衡賜實方和詩語
人のいもうと式部丞大江匡衡（弾正少弼従四位下。左京大夫重光男）
といふ人ありきけるに、此匡衡、後朱
実方朝臣乃陸奥守にまかりてのち、国
にくだ

りてあるころ、匡衡、ちゝ、続てゆくる
都にいとをしみ思ひ出でゝ、人に書紙こそ
実方朝臣これをとりて、宮てうしてゆくを、
ども、ろくに紙にかうはかせ
和歌　ひとりきゝわく人の中にいかにとそ
わがまちくらんくれなゐのふかまつやま
とぐれしらのゝをぐるべ。和歌　此匡衡いとゝ
やちんぞうはえしいみりくよみける

今昔物語三